



令和6年 能登半島地震のお見舞い

2024年1月1日に発生いたしました「能登半島地震」により、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆さま、そのご家族の方々に心よりお見舞い申し上げます。被災地の一日も早い復旧をお祈り申し上げます。

Contents

JAPAN TOILET ASSOCIATION



1	小林会長新年あいさつ	19 - 20	特別寄稿 医療的ケア児がおでかけするために
2 - 7	第39回 全国トイレシンポジウム2023開催報告	21 - 25	活動報告 第3回 子どもとトイレ勉強会
8 - 10	2023年度JTAトイレ賞 審査結果	26	私の推薦トイレ
11 - 15	日本トイレ協会40周年にあたり 「温故知新」～これまでの協会と今後～	27	新入会員のご紹介
16	新入法人会員のご紹介		
17 - 18	リレートーク あなたは一日どのくらい笑ったり、笑顔を見せていますか？		

小林会長新年あいさつ

小林 純子 一般社団法人日本トイレ協会 会長



明けましておめでとうございます。

今年も、会員の皆様がトイレ協会の目的に向かって、より充実した活動ができるよう環境を整えてまいります。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

私は会長になって4年目ですが、この間、新型コロナ感染拡大の中での運営でした。会議や交流で使用を始めたリモートは、大きな長所もある反面、人と人とのリアルな交流や議論に制約があるのは否めませんでした。

とはいえ、私達はこの間も、当協会の目的である、「トイレ文化の創出」、「快適トイレ環境の創造」、「トイレに関する社会的課題の改善」の3つのテーマに取り組んできました。全国トイレシンポジウムで、オンラインセミナー「うんと知りたいトイレの話」で、研究会で、マスコミや協会外部からの対応で、海外からの質問の中で、様々な発信ができました。また、一昨年、皆様のご協力で3冊の本を刊行しました。当協会の活動は充実し、より活発になったと考えます。

日本トイレ協会は創立が1985年で来年は40年目になります。会員数は現在、法人、公益公共団体、個人、学生合わせて223人・団体です。近年は、トイレの社会的意味や役割、歴史等に関心を深めたい、快適さ創造、ユニバーサルデザイン、災害時の仮設トイレ等、入会者の興味の内容も幅広く、明確になっているのが特徴です。

そんな状況下、当協会の主な課題はあえて言えば4つあると考えます。

第1は、「会員の期待に対して的確な受け皿ができていないか」です。会員の声に耳を傾け調査が必要です。第2に、会の運営側は定款に添って実施されています。しかし、「新しい会員が増え、社会的期待も高くなっている中、そこに運営上のギャップや長年の間、良しとしてきた省略運行形が新会員等に不透明感を生じさせていないか」も気になります。確認が必要です。そして第3は、「活動の活発化の一方で、各役員や事務局等が労働過多になっている」現実です。当会は、事務局は最小限の費用で、役員はボランティアで成立しています。それ故、各人の事情に合わせ、人選や内容を見直し、役目を多くの人に少しずつ負担していただく組織作りも必要です。第4は会員間の「リアルな交流」の機会が少ないことです。交流を活発にし、会をもっと知って、積極的に参加していただける、多様で多数の人を見出していきたいです。それが、今後のトイレ協会にとって最も大切なことです。

そこで、今年は、会の現状を把握しながら、「会員同士の交流を活発にし、躍進の基礎の年としたい」と考えます。皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

第39回 全国トイレシンポジウム2023開催報告

テーマ： 公衆トイレからつながる「まち」と「ひと」
開催日時： 2023年11月16日（木）10:30～16:30
会場： 東京ビッグサイト東2ホール及びオンライン



シンポジウムを終えて

浅井 佐知子 第39回全国トイレシンポジウム実行委員長

第39回全国トイレシンポジウムにおいては、170名という満席になるほどの会場参加、オンライン参加180名と多くの方にご参加いただき、おかげさまで盛会に終わることができました。ありがとうございます。39回も続いたことに感慨があります。私は第1回目の時は、トイレ協会を知らなかったので参加していませんが、その開催地である伊東市の城ヶ崎海岸に、昨夏行ってきました。写真で見ただけだったトイレは、法的な対応による改修で風情が減少していた部分がありますが、通りがかる観光客の感嘆の声があがるほど、和風のトイレは健在でした。改めて公衆トイレを考える、というテーマの時に、実行委員長となることも巡り合わせを感じました。

第Ⅰ部のパネルディスカッションにおいて、TTTのクリエイターで、登壇いただいた坂倉さん、アンケートに回答いただいた方々には、本当に感謝しております。皆様の真摯な声があれば、参加者への心打つディスカッションにはならなかったのではと思っています。そのための準備に時間がかかり、プログラム決定が遅くなりましたが、最後までTTTという取組を次につなげるためにもという思いがあったからです。日本財団の方にも大変お世話になりました。

シンポジウム終了後のアンケートでは、「公衆トイレの企画・設計から維持・メンテナンスについて理解でき、有意義でした」「建築家の方がどんな思いで取り組んだのかを知れて楽しく拝聴させてもらった」「TTTを通して、トイレの都市でのあり方、使われ方、そしてそれを維持していく理念をそれぞれの立場で試行錯誤しながら考え、試し、継続的に改善していることを改めて実感できた」「取組事例もいろいろな切り口でのアプローチが興味深かった」など、伝えたい内容を理解いただき、好評価だったこと、胸をなでおろしています。3年ぶりの有料交流会も開催でき、もうひとつの目的でもある親交を深めることができたのではないかと喜んでいます。トイレ協会では、初代会長の西岡先生の時から、交流会の最後は、参加者全員で輪になって手をつないで、「アロハオエ」を歌います。このような締めめの会は、他にはなく、トイレが縁で、つながり広がることを感じます。

今回、シンポジウムの事務局長として、地域交流センターの橋本さんをお願いしました。第Ⅱ部のパネルディスカッションでも話題となった、「まちの駅」の連絡協議会事務局も行っており、内容に踏み込んでいっしょに組み立てを行ってくださり、本当に感謝しています。

あらためて、ご支援、ご協力をいただいた皆様、実行委員ほか関係者の皆様に、御礼を申し上げます。最後にひとつだけ。先日、またTTT巡りに同行しました。時間があれば、ぜひ、使ってください。見るだけでは気づかないことがあります。特に作り手としては、大事にしたい点だと感じています。



パネルディスカッションⅠ まとめ

藤山 真美子 個人会員 / お茶の水女子大学 准教授

第一部のパネルディスカッションでは、昨年に引き続き、THE TOKYO TOILET(TTT)を取り上げ、TTTで実践された公衆トイレの設計や提案から何を学んだか、またどのように次の公衆トイレの在り方につなげていくかについて、以下の3つの視点から、議論を行いました。TTTクリエイターとして参加された坂倉竹之助氏、小林純子氏、TTTメンテナンスアドバイザーを努める山戸伸考氏、コメンテーターとして長澤悟氏にご登壇いただきました。

クロストークテーマⅠ

公衆トイレは社会にとってどのような存在であるべきか：最初に、TTT全17作品について改めて会場に紹介すると同時に、坂倉氏、小林氏、山戸氏のTTTとの関わりを伺いながら、社会における公衆トイレの在り方を考えました。

第39回 全国トイレシンポジウム 2023 開催報告

公衆トイレからつながる「まち」と「ひと」

坂倉氏からは西原一丁目公園トイレについて、「TTT が実施される以前の同敷地は汚く怖い場所であり、道行く人たちにも通りやすく、過ごしやすい場になればとの想いで、明るさと安全性を重視した行灯というテーマとした。内部は、曇りガラスに木々をモンタージュし、今後、周囲の木々が伸びてくることで雰囲気が高まってくればと考えた。」との説明がありました。また、3つの個室が並列した配置計画に関しては、「車いす利用者や LGBT の方、男女の区別なく誰もが平等に使える空間を目指し、三つのユニバーサルトイレを配置することにした。」との説明がありました。メンテナンスの観点での素材選びに関する長澤氏の質問に対しては、「商業施設やコンビニのように管理者が明確な場合は管理頻度が保たれるが、公衆トイレは管理方法が難しく、管理が不十分な現状があると思う。今回、TTT のメンテナンスに対する姿勢に感動し、クリーンな状態を保てる素材を選定した。また、利用者が接触せずに自動でトイレを利用できる工夫をした。」との回答がありました。

小林氏からは笹塚緑道公衆トイレについて、「敷地は、高架下の高さ制限、暗渠による荷重制限があり、北側は日中でも暗い埋没した場所だった。女性の利用が圧倒的に少ない状況もあり、周辺環境に馴染ませるよりも、通行人や住民に愛される存在感のある形態を持つことが重要だと考えた。その上で何より排泄空間の広さや快適性を優先するため、大きな窓の設置や、他者の存在が認識できるブース配置を行った。また外壁にはコルテン鋼を使用し、街に次第に馴染んでいく姿を作りたいと考えた。」との説明がありました。利用実態に対する設計者、設置者、管理者の在り方についてどう考えるかとの長澤氏の質問に対しては、「以前設計した公衆トイレでは、役所（設置者、管理者）の意気込みもあり、設計者も利用実態を反映したデザインに努めたものの、それでも汚損・破壊行為が起きる現実を経験した。公衆トイレは、不特定多数の利用者で、常駐管理もない条件下にあり、快適さの持続が一番難しく、安全清潔の持続と、公衆トイレのイメージを変えるデザインの両輪が重要となる。しかし、自治体予算は非常に厳しく、メンテナンスは脆弱である。従来の公衆トイレ設計では、このレベルを前提とした入札条件であることが未だに多く課題だ。」との回答がありました。

また、日々 TTT のメンテナンスに携わっている山戸氏からは、「TTT の公衆トイレは他のものと比べて利用者がとても多く、特に女性の利用が多いと感じる。公衆トイレの中でも女性用は利用が少ない現実があり、公衆トイレが全く利用されていない状況はもったいなく、汚く暗いトイレを TTT のように快適な状況に転換して活用されればと思う。TTT のメンテナンスをしている際にも綺麗なトイレを作ってくれてありがとうと近隣の住民から声をかけられたことがあった」との説明がありました。また、長澤氏からの「TTT の中でもメンテナンスしづらいトイレはあるのか」という質問には、「利用率が高いトイレで、壁も床も白くさらに凹凸のある素材が使われていると、付着したさまざまな汚れを洗い出すのがとても大変で、もう少し素材に気をつかってもらえたらと思う」との回答がありました。

長澤氏から、小括として、社会における公衆トイレの存在に関して、以下が示されました。

- 1) 公衆トイレとは、公共トイレである： 排泄というのは、言わば、生きていることの証のようなものであり、外で活動すれば必ず排泄の場所が必要となる。公共トイレは、それぞれの都市活動が行われる場所に、排泄の場所として付随して設けられるものである。
- 2) 公衆トイレの活動の対象は、街であり都市そのものである： 街での活動そのものや都市活動の場を支えるのが公共トイレである。TTT では、建築家が、デザインの力を通じて都市課題の改善効果や可能性を皆に認識させるきっかけを作ったと言える。社会や都市における公衆トイレの在り方を皆で考える機会を提供した企画だったのではないかと。

クロストークテーマ2

新たな公衆トイレの在り方を模索していく中で安全・安心・衛生とはどう向き合うか：次に、社会における公衆トイレの在り方を考えていく中で、安全・安心・衛生に対する考えを、メンテナンスおよびデザイン両面から伺いました。

メンテナンスサイドの意見として、山戸氏からは、「メンテナンスしづらいのでデザインを押し込めるということではなく、デザインごとのメンテナンスのあり方を提案したい。一方で、素材や部品のデザインがどのような竣工後の状況につながっているかという具体的な事象を、デザインとメンテナンスの相互が情報共有をすることが、今後の広範な安全・安心・衛生に繋がっていくのではないかと思います。」とのコメントがありました。

これに対し、設計者サイドの意見として、坂倉氏からは、「安全・安心・衛生の持続に共通する一番重要なことはメンテナンスであり、タイル目地の清掃から公園の夜間管理までスケールや状況は異なるものの、長い時間の中で、如何に維持管理していくかという視点が重要である。いわゆるデザインというのは本当の一部でしかなく、メンテナンスを如何にできやすくデザインを行うかが重要になってくるのではないか。」とのコメントがありました。

同じく設計者サイドの意見として、小林氏からは、「安全・安心・衛生の前に公衆トイレは不名誉な存在であり、名誉を回復しユーザに親しまれるためにはデザインの力が圧倒的に重要である。しかし、設計はあくまでも、その先の現実を予測する行為であり、メンテナンスはその現実を対処するという現実がある。このため、竣工前・後の両輪として、デザインとメンテナンスの相互が情報共有をすることが望まれる。例えば山戸氏は、週に1回、月に1回必ず TTT17ヶ所を回って、カルテを作っている。このように蓄積された情報はメンテナンスだけでなく計画にも活用することができると考える。」とのコメントがありました。

長澤氏から、小括として、公衆トイレと安全・安心・衛生に関して、以下が示されました。

1) 公衆トイレは、形を持つ存在である： 人目につき、人の集まる公衆トイレがきちんとデザインされた形を持つことで、街の景観に寄与するという、公衆トイレ独自の建築のあり方を TTT は示してくれた。実は公衆トイレが、安全・安心・衛生の面から、バリアフリーでインクルーシブなまちづくりに貢献する力を持っていると認識させてくれたのではないかな。

2) 優れた建築は、課題を皆で共有し意識させる力を持つ： TTT は、安全・安心・衛生に配慮することがデザインの自由度を奪うのではなく、むしろデザインの可能性を広げ、都市の課題を、空間を通じて社会に明示し共有する力があることを示してくれた。透明トイレや音制御トイレ等、社会課題に対して色々な解があることを新鮮に伝えてくれたのではないかな。

クロストークテーマ3

今回「THE TOKYO TOILET」から何を学び、どのように今後につなげていくか：最後に TTT を踏まえた今後の公衆トイレに寄せる想いについて伺いました。

坂倉竹之助氏：TTT が成し遂げた一番の功績は、今まで公園の片隅にあって、皆が気付かなかった施設に対して関心を集めることでできたことではないかな。デザインによる配慮やメンテナンスとの協働はもちろん、ユーザに精神的に与える印象として綺麗なものを作ること、汚しちゃいけないというようなユーザーの想いを醸成していくことが、今後の公衆トイレの取り組みを繋げていくきっかけや目標になっていくのではないかと考える。

小林純子氏：公衆トイレは街の重要な繋ぎ役である認識を新たにし、設計やメンテナンスが主に入札金額で決まる従来の構造を改革できればと願っている。今後の公衆トイレのレベルアップのためにも、TTT の更なる情報開示を期待している。また、設計者とメンテナンスサイドによる科学的データの知見共有、利用マナー向上の教育や運動を行うことなど、総合力を持った日本トイレ協会だからできる活動を社会に提示し、発信していきたいと思う。

山戸伸考氏：TTT を今後繋いでいくため、ゴミを捨てないというごく当たり前のことを利用者の方をお願いできればと思う。使う人も、愛情を持って公衆トイレに接していただきたい。そして、設計者、メーカー、メンテナンス、利用者などの様々な人たちが参加する日本トイレ協会という場所で、現実に行っていることの情報共有や議論を今後も続けることが、より良い公衆トイレを生み出すきっかけになると期待している。

長澤悟氏：公衆トイレが単に排泄の場ではなく、デザインを通じて利用者行動を変える力や近隣住民に喜びを与える存在になり、都市のイメージを高める意義や効果を持つことが、今回 TTT を通じて発見されたのではないかな。今後の提案として、山戸氏のようなメンテナンスの専門家が蓄積した知見を若手の建築家に伝えながら、新しいトイレや街をデザインするチャンスを社会が作っていくことを、公衆トイレの設置者に期待したいと思う。

第一部のパネルディスカッションでは、以上の3つのクロストークを通じて、TTT は設計だけでなく維持管理まで一貫したプロジェクトである点に大きな意義があるとの共通理解を得ました。特に、メンテナンスを通じて、竣工後の継続的な情報蓄積を行うという取り組みは、公衆トイレにおける空間そのものや利用者個々の課題を浮かび上がらせる重要な仕組みであることを知ることができました。このような視点が広く普及し、公衆トイレのデザインとメンテナンスを繋ぐプラットフォームが社会に広く構築されればと思います。今回のシンポジウムのように、様々な立場を超えた情報共有がこれからも継続され、公衆トイレの存在が都市スケールでの議論に発展していくことが期待されます。

パネルディスカッション 2 まとめ

浅井 佐知子 運営委員 / 有限会社設計事務所ゴンドラ

第Ⅰ部では TTT から学んだことを様々な視点から提示されました。第Ⅱ部のパネルディスカッションでは、それらを実際に今まで各地で取り組んでいる事例もあるので、具体的な取り組みを紹介し、公衆トイレのまちにおける可能性と課題を考えました。

「健幸まちづくりとまちの駅のトイレ」久住時男氏

「学校のトイレをよくすると学校が変わる」ということを長澤先生、小林会長から聞いていました。その視点で「公衆トイレが変わると街が変わる」との構想のもと、朝市のトイレの改修から始めました。地元の人が清掃を行っています、きれいであることを褒められ、自分たちの自慢のトイレとなり、愛着と誇りを持って、十分にメンテナンスをしようと好循環となっていっています。道の駅「パティオ新潟」では、地域のおもてなしと位置づけ、第 1 回日本トイレ大賞を受賞しました。トイレを利用しやすく施設の中心に配置し、庁内の職員の受け止め方にも影響を与えました。目指す都市像を「住むだけで健やかに幸せに暮らせるまち」とし、「歩いて暮らせる・歩きたくなるまち」を構築してきました。その絶対条件のひとつに「快適なトイレ」があります。全国に 1318 か所ある「まちの駅」は、だれでもトイレが利用できる「まちかどのお休み処&溜まり場」です。道の駅は数億円かかりますが、まちの駅は数千円で登録できます。現在、見附市では 39 駅あり、公衆トイレが 39 か所増えたことになり、歩いて暮らせるまちに大きく資するものです。

「みんなに喜ばれるまちのつくり方 ～まちぶらプロジェクト～」吉野直樹氏

今、長崎市は 100 年に一度といわれるまちづくりが進んでいます。まちなかでは、市民と協働した「まちぶらプロジェクト」を展開していて、歩いて楽しいまちづくりを行っています。まちなかの公共トイレを市民との議論を重ね、整備してきました。地域力によるまちづくりです。まちなかでの公共トイレに携わる部署はさまざまですが、「まちなか公共トイレ整備指針」を作り、このプロジェクトが全体をつなぎ、予算立てから計画・整備まで、進めやすくなっています。トイレづくりにおける細かい設備への配慮、庁内の職員がチームに分かれてコンペを行っての提案、高校生がトイレを調査してつくったトイレマップなど、活動しています。一番大事な維持管理についても、第Ⅰ部で発表された山戸さんに、トイレ診断、臭いのメカニズムなどの説明を受け、担当者の意識が変わり、良い効果が表れています。まちぶらプロジェクトが人と人とがつながる取組になっています。

「平常時からの連携がいざという時の行動に 災害派遣トイレネットワークとは」太田智久氏

富士市が導入しているトイレトレーラーは、水洗式でトイレが 4 部屋あり、乗用車で牽引して移動できるタイプです。広さ、各個室に手洗い、鏡、LED 照明があり、直接入れる階段が設置されています。オプションで、2 部屋を 1 部屋にして、昇降機を付けたバリアフリー型も最近では選択できます。このような快適さを持っているので、災害時に限らず、平常時のイベントでも多用しています。2017 年 7 月に、「災害派遣トイレネットワークプロジェクトみんな元気になるトイレ」に参加し、最初の 1 台を導入し、台風で被災した倉敷市や君津市に派遣し、とても喜ばれました。その後、協議会を設立し、今では 20 自治体が参加、災害派遣プログラムをつくり、連携して、全国にいつでも派遣できるように研修、ノウハウの共有を行っています。

今泉氏（コメンテーター）

トイレを見れば学校がわかる、まちがわかる、つまりトイレの姿は民度のバロメーターと感じます。トイレに入ると健やかに、幸せな気分になれる、「健幸トイレ」トイレを展開する、公共だけが公衆トイレを作るのではなく、準公共トイレというような提案がありました。トイレづくりを役所だけでなく、そこに住んでいる人も一緒になってやっていく、今までのメンテナンスは守りでしたが、これから攻めのメンテナンスをプロだけでなく、住む人も一緒に加わってやっていこう、という気持ちを感じました。イベント時にも使える快適なトイレトレーラー、それを災害時にネットワークで補充、補完、補強していく、素晴らしい取組みだと思います。文化の薫る健やかで幸せな気分になるトイレ「幸集トイレ」を、行政、市民、設計者、メンテナンスの方、利用者などが加わって、ネットワークで作っていく、そんなトイレづくりが進むとよいのではないのでしょうか。

最後に

公衆トイレの可能性という点では、公共トイレは固定されているものだけではなく、移動で使う公共トイレもある、ということで、トイレトレーラーでの取組も取り上げました。どの事例も、楽しく気持ちよく取り組む、そして、人と人がつながっていくと大きな力になることを示していると思います。

トイレシンポで紹介されたトイレトレーラーが被災地で使用されている映像を目にした時は、その活用も連携の賜物と実感いたしました。改めて、情報の収集と発信・共有の必要性を感じました。能登半島地震で被災された皆様へ、心からお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興をお祈りいたします。



総括

上野 義雪 副会長 / 上野研究室主宰

第 39 回全国トイレシンポジウムは、『公衆トイレからつながるまちとひと』をテーマとして、パネルディスカッションその 1 では、「THE TOKYO TOILET (TTT)」の設計に関わられた坂倉竹之助氏、小林純子氏、TTT の定期トイレ診断を行っておられる山戸伸孝氏らにご登壇をいただき、都市空間の一部を形成する公衆トイレの適切な在り方や運用について、藤山真美子氏の名進行により議論が成された。

坂倉氏からは、明るさを保ち、安全性を確保することを目標に設計をされたこと、小林氏からは、安全、清潔の持続性担保の重要性などについて説明をいただいた、山戸氏からは、デザインの持つ力がその後（メンテナンス）に影響をすること、メンテナンスのし難い床材使用など、具体的な事例について説明があった。このパネルディスカッションに向けて、TTT 設計に関わられた設計者を対象に設計意図や想い、今後の公衆トイレにおける視座などについてアンケート調査が実施され、この報告とともに 17 作品の紹介があった。コメンテーターの長澤悟氏は、17 カ所すべての作品をご覧になられ、ご専門の建築計画、地域づくり、学校トイレの快適化の視点から、TTT により学習したことの発展、若手建築家に山戸氏の持っておられるノウハウを伝えていくことの重要性について述べられた。

パネルディスカッションその 1 は、TTT から学んだ事柄、新たな模索、今後繋げていくべき事項などの意見交換をする場として企画し、昨年度の基調講演「THE TOKYO TOILET プロジェクトを語る」を継続しつつ発展させることを念頭に企画されたものである。

午後のパネルディスカッションその 2 では、全国まちの駅連絡協議会長で前見附市長の久住時男氏、長崎市まちづくり部まちなか事業推進室の吉野直樹氏、富士市危機管理室防災危機管理課の太田智久氏にご登壇をいただき、浅井佐知子氏の進行により、各地における公衆トイレにおける取り組み事例の紹介ならびにまちにおける公衆トイレの可能性と課題について議論が成された。久住氏からは、トイレからまちを変えていく意義や歩いて暮らせる・歩きたくなるまちづくりの延長線として、快適なまちの駅トイレの実践について熱く語っていただいた。吉野氏からは、観光都市としての長崎市におけるまちぶらプロジェクトにおけるトイレの取り組みを通して、メンテナンスの改善と継続、トイレの専門部署がないことなどをご報告をいただいた。太田氏からは、トイレトレーラーの採用による平時からの活用と災害派遣トイレネットワークへの取り組みについて報告をいただいた。コメンテーターの今泉氏からは、締めめの言葉として「文化の香る公衆トイレ」をいただいた。

引き続き、会員による活動発表として 8 題の発表があり、JTA トイレ賞の結果発表を以って、第 39 回全国トイレシンポジウム 2023 は盛会のうちに幕を閉じることができた。概要集に概要が掲載されており、併せてご覧いただきたい。

会場並びにオンライン参加の皆様、そして関係者の皆様には、心より感謝を申し上げます。

第39回 全国トイレシンポジウム2023 開催報告 公衆トイレからつながる「まち」と「ひと」

当日の様子



パネルディスカッションその1の様子



会場の様子



パネルディスカッションその2の様子



交流会の様子。参加者でアロハオエを合唱！



全国トイレシンポジウム会場では、
国際委員会より世界のトイレ活動団体の紹介パネルの
展示も行いました。

JTAトイレ賞委員会より

応募作品

30 作品

(作品部門：11, 著作・研究部門：6, 維持・管理・運営部門：4 社会的活動部門：9)

選考方法

(1) 審査：審査委員および協会運営委員等による審査を基に、審査委員会での最終審査により、選奨・奨励
奨を選定

(2) 一般投票：トイレシンポジウム、トイレ産業展来場者による投票（255 名投票）により、一般投票賞を
選定

審査委員会

◆委員長：小松 義典（運営委員、名古屋工業大学大学院准教授 / 建築環境工学）

◆副委員長：中野 和典（運営委員、日本大学工学部 教授 / 環境生態工学、環境工学）

◆幹 事：浅井 佐知子（運営委員、設計事務所ゴンドラ / 建築・ワークショップ）

◆委 員：小林 純子（会長、設計事務所ゴンドラ代表 / 建築）

高橋 未樹子（理事、コマニー(株)研究開発本部 / ユニバーサルデザイン）

細野 直恒（運営委員、NPO 法人にいまーる理事 / ICT、人間工学・ユニバーサルデザイン）

村上 八千世（運営委員、常磐短期大学准教授 / 幼児教育・環境）

◆部門審査委員

A) 作品部門

小松 義典（前掲）

長澤 夏子（お茶の水女子大学基幹研究院 教授 / 建築計画・環境心理）

B) 著作・研究部門

川内 美彦（運営委員、元東洋大学ライフデザイン学部教授 / ユニバーサルデザイン）

森田 英樹（運営委員、総合トイレ学研究者 / トイレ歴史）

C) 維持・管理・運営部門

山戸 伸孝（運営委員、(株)アメニティ代表取締役社長 / トイレメンテナンス）

山本 浩司（理事、中日本高速道路(株)東京支社 / 道路施設管理運営）

D) 社会活動部門

山本 耕平（運営委員、(株)ダイナックス都市環境研究所代表取締役会長 / 環境・まちづくり）

中野 和典（前掲）

アドバイザー：高橋 志保彦（名誉会長、神奈川大学名誉教授 / 建築・都市デザイン）、

鎌田 元康（名誉理事、東京大学名誉教授 / 建築環境工学・建築設備）

選考結果

【JTA トイレ賞】

A) 作品部門

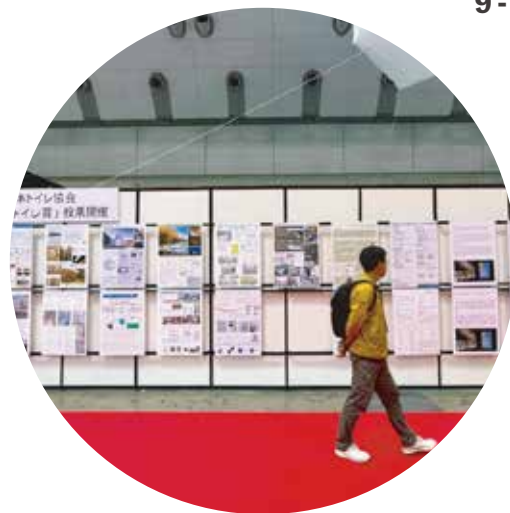
●「誰が使うか」ではなく「どう使うか」にフォーカスしたトイレ

佐野優・畑島楓（株式会社日建設計）

D) 社会的活動部門

●公民連携！みんなで創ったみんなにやさしい新庁舎トイレ

林田輝久（長崎市企画財政部大型事業推進室）



【奨励賞】

A) 作品部門

●六甲最高峰トイレ

小原賢一・深川礼子（株式会社 ofa）

●"Restroom&Restroom+ 関電不動産八重洲ビル

～一人ひとりが働きやすいオフィスにふさわしいトイレ空間づくり～

植田・高田・杉本（関電不動産開発株式会社）

中藤・藤本・古畑・酒井・吉田・小倉（大成建設株式会社）

B) 著作・研究部門

●The Secret Social Phobia: Shy Bladder Syndrome (Paruresis): Second Edition

知られざる社交不安障害：排尿恐怖症（パルレシス）：第2版

Steven Soifer, Ph.D. American Restroom Association, Program Manager International Paruresis Association, Senior Consultant Human Sciences Institute, Vice-President"

C) 維持・管理・運営部門

●IoT によるトイレ維持管理の効率化～スマート SA マネジメントシステム～

関谷有紗加・鈴木健・馬屋原敦・伊藤佑治・嶋浦早紀・金森愛咲美（中日本高速道路株式会社 東京支社）

泉史朗・今井詩織（中日本ハイウェイ・エンジニアリング東京株式会社）

D) 社会的活動部門

●“待てる工夫” アイキャッチとなるアート

～保護者のトイレを待ちきれない発達障がいのある子どもたちを手がかりに考える～

寺嶋菜々（TOTO 株式会社）・橋口亜希子（橋口亜希子個人事務所）・垣花創（有限会社ステップ・ワン）

●SDGs 時代のライフサイクル延長への挑戦（駅トイレ）＜トイレコーティング＞

吉丸猛・中山勝・有泉勝也（株式会社小田急ビルサービス）

【未来賞】

●Evolution of Airport toilet cleaning management ~Smart management makes toilet cleaners work more efficient and passengers experience more satisfied!

空港トイレ清掃管理の進化策 ～スマートな管理をすることでトイレ清掃員の作業効率をアップさせて利用者の満足度もアップさせる 方策

Jo Chun Liao/Wen Cheng Wang(TIAC Ltd.)

【ユーモア賞】

●トイレ NIE 活動

小山照葉・田北璃空（日本文理大学付属高校2年 報道委員会）

【一般投票賞】

●Evolution of Airport toilet cleaning management ~Smart management makes toilet cleaners work more efficient and passengers experience more satisfied!

空港トイレ清掃管理の進化策 ～スマートな管理をすることでトイレ清掃員の作業効率をアップさせて、利用者の満足度もアップさせる方策

Jo Chun Liao/Wen Cheng Wang(TIAC Ltd.)

受賞作品それぞれについての審査員講評、その他の応募作品は、下記協会サイトでご紹介しています。

<https://j-toilet.com/2023/12/13/goodtoiletselection-4/>

全体総評

小松 義典 審査委員会委員長 / 運営委員 / 名古屋工業大学大学院 ながれ領域 准教授

一昨年に部門別の応募を導入し、本年は名称も JTA トイレ賞に変更しました。トイレに関連する様々な部門で活躍される皆様の優れた作品や活動を日本トイレ協会が表彰する意図がよりよく伝えられるようになったものと考えています。

こうしたこともあり、昨年をさらに上回る数の 30 作品の応募をいただきました。1 枚のパネルで伝えることは簡単ではありませんが、こうしたプレゼンテーションに関するレベルもますます高くなっています。JTA トイレ賞の 2 作品や奨励賞の 6 作品はもちろんのこと、惜しくも選外となった作品にも個々に良い点がありました。

そこで、作品の特に優れた点に注目して表彰をするべく、本年は未来賞、ユーモア賞もお贈りすることにしました。今後もいろいろな賞をお贈り出来る作品の応募を期待しています。

最後に、ご応募いただいた方や審査・投票にご協力いただいた皆様に感謝を申し上げます。来年も本年を超える盛り上がり方を期待しております。誠にありがとうございました。

Japan Home & Building Show 2023 第 9 回トイレ産業展 出展報告 事務局

開催期間：2023 年 11 月 15 日（水）～ 17 日（金） 10:00～17:00

会場：東京ビッグサイト 東展示棟東 2 ホール

主催： 一般社団法人日本能率協会 協賛： 一般社団法人日本トイレ協会他

第 9 回トイレ産業展へ災害・仮設トイレ研究会と一緒に出展し、協会、研究会の活動の PR をしました。協会ブースではデジタルサイネージを設置し希望のあった法人会員の紹介を流し、協会の活動資料の他、会員企業のリーフレット、全国トイレシンポジウム概要集等の説明配布を行いました。また、災害・仮設トイレ研究会では 8 月に実施した「災害時用トイレの備蓄に関する調査」の報告資料と会員企業より提供された携帯トイレのサンプルをオリジナルバッグに入れて配布しました。新型コロナが 5 類に移行し、昨年に比べより多くの来場者がありました。災害時のトイレ問題を含めトイレに関心を持つ方が増えているように感じる 3 日間でした。期間中、ブースへ足を運んでくださった会員のみなさま、ありがとうございました。

Japan Home & Building Show2024 開催予定

会期：2024 年 11 月 20 日（水）～ 22 日（金） 会場：東京ビッグサイト東展示棟



山本耕平 運営委員 / (株)ダイナックス都市環境研究所代表取締役会長

活動はいよいよ国際的に。ベルサイユの宮殿でトイレの話をした

第4回シンポジウムは倉吉市－長寿社会計画とトイレ

鳥取県のちょうどもん中あたりに倉吉というまちがあります。江戸・明治期の白壁土蔵群の町並みで知られており、芸術や文化の香りがただようとてもすてきなまちです。すぐ近くに三朝温泉（みささおんせん）があり、観光地として知られています。

その倉吉市から私のところに部課長さん数名が来られて、全国トイレシンポジウムをぜひ開催してほしいという、誘致を受けました。伊東市でのシンポジウムにいられていたようで、市長からの厳命だということでした。第3回目は横浜市に決定していたので、4回目を倉吉で開催しようということになりました。

当時の牧田実夫市長は「水と緑と文化のまち」をかかげてさまざまなユニークな政策を打ち出していました。私がもっとも感銘を受けたのは「長寿社会計画」です。国が「ゴールドプラン」（高齢者保健福祉計画）を策定したのは1989年なので、それよりも早く高齢者福祉のマスタープランをつくっていました。余談ですが、「ゴールドプラン」は、当初は「シルバースート」になぞらえて「シルバープラン」だったそうですが、「シルバーよりゴールドだ」とどなたかの鶴の一声で「ゴールドプラン」と命名されたそうです。

この長寿社会計画のキモは、高齢者が安心して歩けるまちをめざすということでした。トイレはそのための必需のインフラだという観点から、白壁の町並みにふさわしいデザインのトイレと休憩所をつくったり、シンボルの打吹山公園で長く滞在できるようなトイレと休憩所の整備が進められていました。しかし「トイレにそんなお金をかけるのはけしからん」という反対意見もあり、高校の文化祭では「トイレ市長」を揶揄する展示が行われたり、当地のメディアも必ずしもよい施策として報道はしていなかったように思います。そこへトイレ協会が登場してトイレに注目が集まるようになったので、市長としては大いに面目を施したわけですね。（今も倉吉市のHPでは、市の「みどころ」としてトイレが紹介されています。<https://www.city.kurayoshi.lg.jp/gyousei/intro/00/1/>）

トイレ列車が走り、市をあげたイベントに

倉吉市からは、経費負担も含めて市を挙げて取り組んでいただきました。シンポジウムのテーマは「トイレ文化と健康からのまちづくり」としましたが、テーマにこだわらずいろいろな企画を考えました。その一つが学校でのトイレ学習です。教育委員会に諮ってもらって、小学校、中学校のモデル校を選んで、先生方がつくったカリキュラムで実際の学習をするというものです。カリキュラムづくりには東京学芸大学の小澤紀美子先生にもご協力いただきました。一日だけの授業ではなく、事前のワークショップもふくめて、先生方にとっては負担の大きい取り組みでしたが、得るものも大きかったと思います。カリキュラムや授業の内容まで詳しく書くことはできませんので、関心のある方は、拙著「まちづくりにはトイレが大事」（96、北斗出版）に書いていますのでご覧ください。

もう一つの大イベントとして、東京から倉吉まで「トイレ列車」を走らせました。1987年に国鉄が分割民営化されましたが、別会社になったJR東・西をまたいで走った最初の特別列車です。

国鉄は民営化の目に見える象徴として、トイレの改善から着手しました。山手線のトイレに初のチップトイレをつくるなど駅舎のトイレ改築を進めるとともに、既設のトイレの連結式小便器（飛沫が飛ぶ！）を陶器製の便器に変えたり、トイレトーパーをつけるなど、いろいろな取り組みを進めました。駅のトイレがグッドトイレ10に選ばれると、JR東日本ではトイレの改善が社会に評価されたというアピールのために、社長直々のお声掛けで受賞記念パーティを開催したほどです。また東日本の駅舎を管理する施設電気部の大忘年会にも招かれましたが、現場の方々の喜びの声も大きかったことを思い出します。

そんなわけで、ＪＲ東日本では西日本と調整して、倉吉でのトイレシンポジウムに東京から夜行の特別列車で行くという話にのってくれました。倉吉市側では、シンポジウムを機会に倉吉駅のトイレ改善をＪＲ西日本に持ちかけて進めることになり、トイレ列車を迎えてテープカットをするということになりました。残念ながら私はシンポジウムの準備のために先乗りしていたので、トイレ列車に乗ることはできませんでしたが、列車内では大いに盛り上がったと聞いております。

白壁づくりの町並みを背景にコンサートを開催したり、シンポジウムでは子どもたちのトイレ学習の成果発表があり、市民からも公民館のトイレや周りを自主的に清掃するようになった話があり、感動しました。

※「まちづくりにはトイレが大事」は、出版社が廃業したため絶版ですが、アマゾンなどで古書として手に入るようです。多くの図書館にも収蔵してもらっているようで、国会図書館の検索サービス(国立国会図書館サーチ)で検索するとお近くの図書館がわかります。

閑話休題－「天女の忘れもの」の話



倉吉の打吹山には天女伝説があり、トイレシンポジウムを機会に「天女の忘れもの」というお菓子ができました。ウンチを模したまんじゅうで、「運がつく」ということで受験生にも人気となり、一時は「鳥取銘菓」と言われるまでの名物になりましたが、ネットで調べると 2007 年 1 月に販売中止になったようです。

このお菓子にはびっくりするようなエピソードがあります。93 年に西岡先生の傘寿のお祝い会が日本青年館で開かれました。そのときに高円宮様がご臨席になりました。堅苦しい会ではなく、アットホームなパーティだったので、差し入れて持ってきたくだんの「忘れもの」を宮様にお渡ししてしまったのです。西岡先生とご親交があるくらいですからユーモアセンスのある方で、その場ではお召し上がりにならず、「皇太子様と会う予定があるのでぜひお渡ししたい、たぶんよろこばれるだろう」とおっしゃったのです！横にいた西岡先生は慌てて、「この話は国家機密だから、くれぐれも口外せぬように」と言われて爆笑したことを思い出します。宮様も先生も亡くなられ、お菓子そのものもなくなってしまったので、機密解除してもよからうと思って書き記しておきます。もしかしたら、今上天皇が皇太子時代に召し上がったかもしれません。ただしあまりあちこちで吹聴はしないようお願いいたします（笑）ググったら投稿がいっぱいありました。写真勝手にお借りしました。

全国トイレシンポジウムのテーマ

トイレシンポジウムはその後脈々と続き、思い出せば毎回いろいろなエピソードが浮かぶのですが、とても紙幅が足りなくなるので以降はテーマの紹介にとどめたいと思います。

伊東市での第 1 回シンポジウムのテーマは「社会とトイレを考える－公共トイレを中心として」、第 2 回江戸川区は「トイレアメニティを目指して」、第 3 回横浜市は「トイレからのまちづくり」、第 4 回倉吉市は「トイレ文化と健康からのまちづくり」でした。

第 5 回の熊本市では、1988 年に、将来に向けてデザインに配慮した建物やまちづくりを進めようという「アートポリス事業」（現在も都市づくりのコンセプトとして掲げられている）がスタートし、その一環として公共トイレ改革に取り組んでいました。そこでテーマは「21 世紀へ向けてトイレ文化を考える」にしました。第 6 回川之江市・伊予三島市（現・四国中央市）は製紙のまちなので「トイレと紙と環境」、第 7 回は金沢市・山中町（現・加賀市）・吉野谷村（現・白山市）で「旅と自然とトイレ」。吉野谷村は山村だからこそ水洗トイレを普及しようという政策を進めており、シンポジウムは一定の成果をアピールする場にもなりました。第 8 回東京都北区は「トイレの進化とこれからの課題」、第 9 回高崎市は「トイレの視点で地域ネットワークを考える」、第 10 回志摩郡 5 町（現・志摩市）「美しい水環境とトイレづくり」、第 11 回長崎県小浜町は「自然と人間にやさしいトイレづくり」と続きます。

シンポジウムがトイレ改革を推進した

10 年くらいの間に公共トイレや駅のトイレは目に見えて改善され、デパートなどの商業施設のトイレが注目されるようになりました。こうした傾向は、トイレ改革、トイレ革命などと呼ばれるようになりましたが、当時はまだ黎明期なので、いろいろな課題がシンポジウムで出てきました。

日本トイレ協会40周年にあたり 「温故知新」～これまでの協会と今後～

障がい者や高齢者だけでなく、乳幼児や子連れの親もトイレの利用に困ることが話題になりました。トイレにおむつ台が設置される前は、木製のベビーベッドが置いてあるトイレもありました。すると、翌年のシンポジウムで折りたためるおむつ台や乳幼児を座らせるイス等の開発が報告されるなど、いろいろな製品が登場しました。

障がい者用トイレについても統一した規格がないので自治体がそれぞれ工夫し、その成果が共有されてきました。屋外の公共トイレにスペースの広いブースをつくと防犯上の問題が懸念されるということが議論され、障害者手帳を持つ人にカギを渡すとか、床に間欠的に水を流してブース内をねぐらにできないようにしようとか、管理者としての苦勞には同情するものの、まったく感心できない方法を採用していたところもありました。それに対して車いす用のトイレではなく広く一般に利用できる多機能トイレとするアイデアが出てきました。たぶん子供用便器を併設した横浜市の元町・前田橋公衆トイレがその嚆矢だったと思います。設計や設備、メンテナンス、利用者のマナー啓発、防犯など、トイレが抱えるいろいろな問題を共有し、対応策をみんなで考える場として、全国トイレシンポジウムは大きな役割を果たしました。

自治体がトイレに注目し始めた背景には、80年代の後半から90年頃までのバブル景気があります。特に88年には竹下内閣が「ふるさと創生事業」という名目で、自治体の規模に関係なく交付税の不交付団体に1億円を配りました。金塊を買って展示したという、知恵のない自治体もありましたが、まさに地域のイメージアップ、ふるさと創生に貢献する事業として公共トイレに投資した自治体が出てきました。前回に書きましたが、「アメニティ」の時代といわれ、トイレの快適さもアメニティの要素という我々の主張を理解する自治体も増えてきました。「グッドトイレ10」に選ばれると全国版で報道されるようになったことも大きかったと思います。

バブル景気が3Kの代名詞であった公共トイレのレベルアップのきっかけとなり、シンポジウムでの議論を重ねる中で、豪華な建築物としてお金をかけたトイレではなく、文字通りトイレアメニティに配慮した方向に向かうようになりました。

国際交流はじまるー日仏トイレフォーラム



トリアノン宮殿で開催した日仏トイレフォーラム

85年7月のジャパントイリスに記事が掲載されたことがきっかけに、海外メディアからの取材や問い合わせがくるようになりました。英BBCや仏Antenne 2(アンテンドゥー)から取材を受け、韓国のメディアからは88年のソウルオリンピックに向けてテレビや新聞が取材にきました。Antenne 2の取材クルーに日仏のトイレ交流を持ちかけると、面白いということですぐに反応がありました。89年に「日仏トイレフォーラム」を開催することが決まり、「ヨーロッパトイレ事情調査団」としてフランス、スイス、オーストリアなどを巡りました。書架をひっくり返していたら、そのときのノートがでてきましたので、ちょっと紹介します。

ツアーの日程は89年5月17日から27日の11日間。最初の都市はミュンヘンでヒアリング、当時のメモによるとドイツでも公共トイレ整備を推進する運動があったが、一般の人はほとんど関心を示さなかった。ノイシュバンシュタイン城には50ペニヒの有料トイレがあった。チューリッヒからグリンデンワルドに行き、山をくりぬいた下水処理場とユングフラウヨッホの水洗トイレを見学し、ジュネーブでは大学でレマン湖の水質保全についてレクチャーを受けた。日仏トイレフォーラムはベルサイユ宮殿の離宮であるトリアノン宮殿の会議室で、パスツール研究所のドダン氏(Andre Dodin)やパリのオートマチックトイレのドコー社社長のドコー氏、パリ市清掃局の技師、吾妻橋のたもとにあるアサヒビール本社ビルをデザインしたスタルク氏など、錚々たるメンバーが集まって、日仏のトイレ文化の違いやお互いの政策、取り組みを報告し合いました。

小林純子さんや坂本菜子さんは、メジャーでトイレの寸法を測りまくっていたように記憶しています。楽しく、かつとても精力的にヨーロッパのトイレを見て回りました。このフォーラムをきっかけに「フランストイレ協会」が発足しましたが、会長であったドダン氏は飛行機事故で亡くなられたということを聞きました。ドダン氏はエイズの研究でノーベル賞クラスの研究者だったそうです。

香港の議会でトイレの審議に参加



香港の新聞で報道された

97年に香港はイギリスから中国に返還されました。返還に向けた準備の一環なのでしょうが、89年頃に香港の地方政府から視察の申し込みがありました。当時の香港は、国の政府にあたる香港政庁と、地方自治体にあたる市政局（Urban Council）、区域市政局（Regional Council）があり、市政局の議員である梁定邦さんらが尋ねてこられました。観光地としての香港の魅力向上のために、トイレに力を入れたいということでした。イギリス本国が返還前にインフラ整備をしておくという背景があったようです。梁さんは銀行の理事長で外科医で議長で、（たぶん）お金持ちのひとつです。

91年にわれわれは梁さんの招きに応じて、香港視察に行きました。あちこちのトイレを見に連れて行かれましたが、日本からトイレの専門家が来たということで、どこでも新聞やテレビが追いかけてきて、当日の夕方のニュースでは全部のチャンネルでわれわれのことが取り上げられました。驚いたのは視察のあとです。いきなり評議会の立派な議場に連れて行かれて、トイレについての審議が始まったのです。議題はこれからつくる公共トイレは洋式とするかしゃがみ式とするか等。香港のトイレの多くは日本同様にしゃがみ式でした。「今日は日本からトイレの専門家が来ている。アドバイスをいただきたい」ということで、「日本でも同じ議論があるが、ある程度は和式を残すという方向である」（当時の考え方）と回答（どなたが回答されたかは忘れました）。そんなふうにいると意見が聞かれて審議に参加したという次第です。

神戸国際トイレシンポジウム

91年のある時、神戸市役所の住宅局から若い担当者が訪ねてきました。神戸でトイレシンポジウムが開催できないか、という趣旨でした。神戸では「アーバンリゾートフェア」という大規模なイベントが企画されており、トイレシンポジウムをその関連のイベントとして開催したいということでした。話の勢いで「国際会議をやったらどうか」と持ち掛けたところ、担当者は「うちの係長はそういう話が好きですねん」という。その係長はなんと私が神戸市役所に在籍していたときの同僚ということがわかり、話を持ち帰って相談するということになりました。これもバブル景気のおかげですね。信じられないことに、話はトントン拍子に進んで開催の費用を出してくれるというのです。

世界初のトイレの国際会議、トイレの展示会ということで、「コンベンションシティ」を掲げる神戸市の方針にうまくはまったということでしょう。大きい事業になったのは、助役さんが後押ししてくれたからでした。実は小川卓海助役は、私が神戸市役所時代の上司で、退職するときに慰留していただいた部長でした。シンポジウムの成功を喜んでくれましたが、阪神大震災の心労から自死されました。

風呂敷を広げているうちに、ヨーロッパに行って登壇者を誘致してこようという話になりました。招待状を携えた新屋係長とともに、92年に再びヨーロッパに出かけました。先駆けて坂本菜子さんらがドダン教授を訪問して調整していただき、パリのパスツール研究所でフランストイレ協会から30～40名くらいの参加者を集め、日本からは10数名のメンバーで第2回日仏トイレフォーラムを開催しました。驚いたのはアメリカ・コーネル大学のアレクサンダー・キラキラ教授（Alexander Kira）が来ているではありませんか。彼は「The Bathroom」というトイレとバスの人間工学の研究書を書いており、TOTO出版から翻訳が出ています。神戸の国際会議についての情報は伝わっていたと思いますが、突然パスツール研究所に現れたのはびっくりしました。神戸にはぜひ参加すると言っていたので、大いに弾みがつきました。

「神戸国際トイレシンポジウム'93」は、93年6月4日から6日まで、ポートアイランドにある神戸国際会議場で開催しました。3日から6日までは国際展示場で「見て、ふれて、語り合おうトイレ展」を開催し、一般の市民も大勢参加していただきました。国際会議の参加者は講師を含めて約500人、企業・業界関係者200人、自治体70人、公団等の公共セクター20人、大学20人、外国からは30人（オーストラリア、アメリカ、香港、タイ、ベルギー、韓国、台湾、フランス、中国）、その他一般市民などです。ドダン氏から世界の衛生問題とトイレにつ



西岡先生の音頭で、手をつないでアロハオエ

いて基調講演をしていただき、都市アメニティとトイレ、メンテナンス、市民生活とトイレ文化など6つのセッションを開きました。前述のキラ氏のほかに、日本でも知られていた「トイレの文化史」の著者であるパリ国立建築大学名誉教授のロジェ・アンリ・ゲラン氏（Roger-Hen Guerrand）、タイやベルギーの研究者、香港の梁さん、国内からは西岡秀雄先生や高橋志保彦氏をはじめトイレ協会のオーソリティの面々に加えて、「裏側から見た都市」の著者で有名な川添登さんなど著名な方々にも登壇していただきました。交流会では西岡先生の音頭で全員が手をつないでアロハオエを歌いました。

うんと知りたいトイレの話のご案内

第32回 能登半島地震緊急報告

2024年2月15日（木） 18時～20時

能登半島地震では多くの方々が困難な暮らしを余儀なくされ、今回の震災でもトイレは大きな問題となっています。現地で支援活動を行っているトイレ協会会員から被災地の状況と災害時のトイレ支援の報告をしていただきます。参加者のみなさんとリアルに災害時のトイレ問題を考えたいと思います。

新入法人会員のご紹介



HITACHI.CO.,LTD

<https://leptonlabo-hitachi.com/>

株式会社 常陸

日本トイレ協会への入会のきっかけ

新しいテクノロジー（ミネラルイオン）で世界の尿尿処理問題を改善し、人類、地球環境改善に貢献する為に、日本トイレ協会の会員となり、皆様と共に取り組みたいと思います。

会社紹介、事業内容を教えてください。

生活環境に多く存在する汚水、その汚水に含まれる汚染物質（溶解性有機物）を急速に分解、凝集、析出させて浄化するシステムを開発・製造販売しています。

「世界を救うミネラルイオントイレ」をキャッチコピーにして、汚水の再生循環、細菌や臭気の除去を可能とする水洗トイレシステムを展開。

天然鉱物由来の複合イオンで強力なイオン交換作用を引き起こし、汚水中に溶け込んでいる有機物の酸化と還元作用で物質を析出させ、目的の汚染物質を分解除去することが出来ます。バイオ処理と異なり短時間かつ連続で大人数の汚水を処理できる他、温度等の環境要因に作用されずに超省電力で働くシステムとなります。

このシステムをトイレに応用することで、汚水の再生循環による節水を実現させるだけでなく、ミクロの世界を辿ると有機物である細菌や臭気もイオン交換反応で瞬時に分解され、無菌・無臭となります。給排水不要で水洗トイレを実現、更に太陽光システムを併用することでオフグリッド運用が可能となるため、災害用、イベント用、インフラ設備が整っていない山間部等様々な場面での活躍が期待できます。

あなたのお好きなトイレを教えてください。

安全で衛生的なトイレ



あなたは一日どのくらい笑ったり、笑顔を見せていますか？

今泉 重敏 個人会員/(株)まちづくり計画研究所 代表取締役

笑顔で行動する笑行会 農家喜び爆発 百笑一喜	笑顔で食事 笑食ダイエット 笑顔で食べる 笑&ケーキ	賑わいの仕掛け 一店一笑運動 笑顔で買物 笑動買	笑顔が絶えない笑店主 笑顔が一番 笑売繁盛	笑顔と笑いに満ちた笑業地域 笑売人は明るく 笑顔で接客	笑顔あふれる明るい笑店 笑顔に満ちた笑店街&笑顔無き消店街
笑顔あふれる楽しい笑楽校 幸齢化(笑)だったらいいな	笑顔でもらって嬉しい表笑状 笑顔で生涯楽しく学ぶ笑涯楽習	ワッハハハ・・・ 笑標語  【まちづくり笑談師】 今泉 重敏 (あかぬけた婆)		楽しく笑顔で呑む笑酌 笑顔が映る一笑ビン	笑顔で盛付笑進料理 大笑宴会大歓迎！
笑顔になる 景笑地 ワッハハ万歳三回 万歳三笑	笑いのパワー笑エネルギー 笑いを活かした 笑エネのまち	80代笑女 AKB(あかぬけた婆) 笑顔で成約勝ち取る笑談会	笑顔で介護笑トスティ 気品あふれる高貴幸齢の笑笑女	笑い声が出る笑便器 悪を除去する笑臭剤	窓に笑顔が映る笑ウインドー 笑いが飛び交う化笑室

「笑う門には福来たる」「笑いは人の薬」「泣いて暮らすも一生、笑って暮らすも一生」などの諺が示すとおり、笑いや笑顔は運を引き寄せ、人を健康に導き、プラス思考にさせるパワーを持つ。私は疲れたとき、嫌なことがあったとき、仕事などでアイデアが出ないとき、極力声をあげて笑い、笑顔になるよう努めている。ときには昔流行った笑袋も活用。笑袋とは、内部に音を出す装置が入った布製の袋のことで、ボタンを押すと録音された「わっはっはっは～、わっはっはっは～」という笑声が再生される。昭和に流行ったもので、これを聴くと、ついついつられて笑ってしまう。私が今持っている笑袋は、男性の笑い声が録音されたもの。笑い声が途中で詰まる感じのリアル感満載で、思わず声をあげて笑ってしまう。創造性が求められる地域の会議で進行役を任されたとき、私はそれをよく活用する。笑袋の笑声を聴きながら、みんなで十秒ほど大笑いしてから会議はスタート。多くの参加者が声を出し笑い、笑顔になるが、中には「どうして笑うのか？」と、目に怒りを表す人も。「このままでは地域は低迷する。何とかしなくては。」地域が抱える課題を解決するために、いろんなアイデアを出すとき、参加者の2割は

前向きな意見を、同じ2割は後ろ向きの意見を述べ、6割はだんまりで様子見が一般的。私はこれを「チャレンジへの2・6・2の法則」と呼んでいる。もちろん私はポジティブな2割の意見を聞き、課題解決に向けアイデアを出し、それを実現するために彼らと一緒に汗を流し、楽しく行動する。その楽しむ姿を様子見の6割は羨ましそうに眺め、心を少しずつ開くようになり、一定期間経過後「私も最初からそう思っていました」と言う。この6割が前向き思考の2割に加わることで、地域活性化に向けプロジェクトは動き出す。「それは無理、できない、やらない」「前例が無いからやらない」と言う後ろ向きの人に対し、説明や説得する時間など65歳の私には無い。65歳の平均余命は後20年弱。秒数に換算すると約6億秒。寝ている時間もあるので、正確には残った人生約4億秒だ。私は可能な限り質の高い人間関係を築き、それらの仲間と共に残りの人生を楽しみたい。



人を元気にさせる笑袋のようなものが、文字で表現できないだろうか。

私はそう考え、“笑”を使った『笑標語』というものを考えた。以下にその例を示そう。おもてなしの心は笑顔から。その笑顔が店内に溢れるから、これが真の「笑店」。店の主は笑顔がウリの「笑売人」で「笑店主」。お客はその笑顔でつつい「笑動買」。笑顔のパワーで人を集めることを「笑集力」と呼ぶ。賑わう店は「笑売繁盛」。笑顔溢れる店がつながるから「笑店街」で、地区は「笑業地域」に分類。通りを歩けば、笑顔映る「笑ウィンドウ」が並ぶ。子どもも笑顔で通学。「笑子化」とはこれを指し、学校は「笑楽校」と化す。笑店街には、笑顔と気品にあふれ、幸せそうな高齢者（高貴幸齢者）が出入りする「笑トステイ」が進出。そこには笑顔溢れる「美笑女」「笑女隊」の姿が。SNS を使って地域情報を発信する女性（ユーチュー婆）がいれば、それを支える5人の爺（5G）も存在。レストランの人気料理は笑顔で盛り付け「笑進料理」で、入口には「大笑宴会大歓迎」の看板。「笑トケーキ」は女子会に大人気。人気の飲み物は「一笑瓶」に入った「笑酎」だ。ボトルの注ぎ口に笑袋が付き、瓶を傾けると「わっはっはっは〜」と笑い声が店内に響き、周囲のお客さんも笑顔に。笑酎の笑い声が聞きたくて、つつい飲んでしまい「笑費」が増加。只今、笑顔を活かした「笑品」を開発中。毎日が“笑月”みたいだ。

こうした“笑”の力をまちづくりや地域づくりに活かす。

約20年前、まんが家高瀬斉先生（東京在住）の協力を得て、福岡県の人里離れた約百戸の農村集落で、240人集落全員の笑顔の似顔絵を描き、それをむらづくりに活かして「松尾百笑村（八女市立花町松尾地区）」を誕生させた。集落の子ども達が「通楽路」として楽しく学びながら学校に通えるように、通学路沿いの農地に耕作者の似顔絵と諺が入った看板を立てた。また、直売所では生産者が一目でわかるように、商品の農産物には似顔絵を貼り地域を盛り立てた。これらの住民パワーはまさに「笑エネ」。例えば“笑”をトイレにも活かしてはどうだろうか！ トイレに入れば、笑顔と化す「化笑室」。きれい、清潔、安全に加え、利用して笑顔になる様々な工夫がプラスされた、不特定多数の人が外出先で自由に利用できる公共トイレは、「化笑室」であってほしいものだ。この実現には、公共トイレが存在する周辺地域住民の参加が欠かせない。公共トイレは地域のイメージ形成とも深く関わり、トイレの利用を通して、周辺地域住民の来訪者に対するお迎え度や民度の一部を感じ取ることができる。これからの地域らしさを感じる公共トイレは、メンテナンスを担う企業のプロ集団に加え、周辺地域の知恵と工夫により、地域住民が里親となって公共トイレの維持・運営に参加することが重要ではないか（守りのメンテから攻めのメンテへ）。これが可能となれば、地域文化の香り漂う公共トイレが誕生し、道の駅巡り同様、公共トイレ巡りも登場するかもしれない。そうなれば公共トイレは「幸共トイレ」。公共トイレは地域の顔のひとつ。公共トイレとして、地域文化の香り漂う「化笑室」が複数誕生し、それらが連携して「トイレの文化祭」が開催され、地域が活性化することを期待したい。

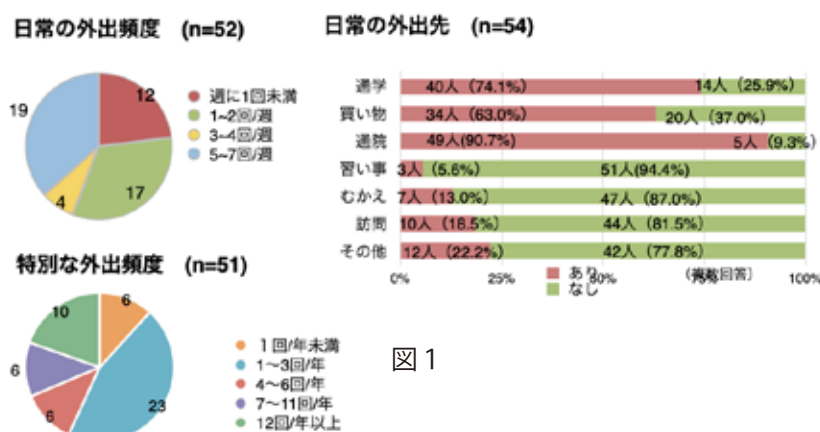


医療的ケア児がおでかけするために

森藤香奈子 長崎大学生命医科学域保健学系リプロダクティブヘルス分野
岡田雅彦 井村弘子 長崎県医療的ケア児支援センター「つなぐ」

医療的ケア児とは、医学の進歩を背景として、NICU などに長期入院した後、引き続き人工呼吸器や胃ろうなどを使用し、たんの吸引や経管栄養などの医療的ケアが日常的に必要なお子さんのことで、全国に約 2 万人いると言われています。令和 3 年 9 月には、医療的ケア児およびその家族に対する支援に関する法律が施行され、環境整備を進めています。

長崎県在宅小児・者を支える会「あいあい」では、家族と日頃の生活の気づきを語り合い、情報共有や学習活動につなげています。その中で「外出時に落ち着いておむつ交換できる場所がなく、外出場所や時間が限定される」という家族からの意見がありました。そこで 2019 年「あいあい」会員以外の排泄介助が必要なお子さんにも対象を拡大してアンケート調査を実施しました。195 通を配布し、55 名より回答を得ました。お子さんの年齢は 1 才～ 44 才、移動介助が必要なお子さんは約 9 割でした。外出の頻度および外出先を図 1 に示します。特別な外出は年 1～3 回が 45%、日常の外出では 95%、特別な外出では 87%が自家用車を利用していました。



カテゴリー	項目	記述数
おむつ交換できる場所がない	ベビーベッドではオムツ交換ができない	29
	おむつを替えられる場所がない	8
	公共交通機関利用時の不便さ	7
トイレの数が足りない	プッシュボタンが壊れている	2
	トイレが狭い	6
	トイレが汚い	4
	トイレが遠い	3
汚染時の対応	外食時の対応	2
	臭い・汚染時の対応	5
	排泄時の対応	5
広さが足りない	作業スペースが狭い	3
	トイレが狭い	3
介護者の負担	きょうだいがいる場合の対応	5
	移動・移動の困難さ	3
	障害の特性による困難感	3
トイレ使用の抵抗感	野外のトイレ使用の抵抗感	2
	和式トイレが利用できない	2

表 1

外出時の困ったエピソードを表 1 に示します。外出先のトイレに設置している『ベビーベッドではおむつ交換ができない』が最も多い回答でした。公共のトイレに設置しているおむつ交換台の多くは、身長 90 cm 未満を想定したもので、一般的な発育でいうと 3 才程度の身長です。障害のないお子さんは、概ね 3 才頃にはおむつ交換が不要となりますし、パンツタイプのオムツであれば、着替え台に立って交換することも可能です。一方で、障害のあるお子さん、特に医療的ケアが必要なお子さんの多くは、仰向けでのおむつ交換が必要で、当然、身長も伸びます。移動介助が必要なお子さんは成長に合わせてバギーをオーダーメイドします。一般のベビーカーや車いすと比べると車長があり、必要な医療機器をバギーに載せているため、重さもあります。



図2、バギーや必要物品の写真

そのため、狭いトイレでは方向転換が難しいこともあります。また、成長に合わせて必要な栄養素が変化します。経管栄養剤を使用する場合もありますが、普通食をミキサー食にして、口から食べる、胃ろうから注入するなど、さまざまです。当然のことながら、一般の乳幼児に比べ、排泄物の臭いもきつくなります。『トイレの数が足りない』では、ユニバーサルトイレの情報が得にくいことと数が少ないことが挙げられていました。

このような状況において、家族がどのように対応しているかを表 2 に示します。多くは駐車場に止めた『自家用車の中でおむつ交換』で対応しているため、臭いの問題や同乗のきょうだいのチャイルドシートを外すなどの対応が必要になります。介助者に頭を支えてもらう / ベッドに対して身体を斜め寝せるなどの工夫でベビーベッドを使う、施設内の人目につかない場所を探すなどの記載もありました。多くの医療機器やケアグッズが必要なことに加え、目隠しや臭い対策などのおむつ交換に必要な物品でさらに荷物が増える状況です。交換を減らす工夫では、『外出前の水分補給を控える』に加え、『用事を中断』や『できるだけ外出を控える』などの残念な対策も記載されていました。

カテゴリー	項目	記述数
車の中で交換	車の中で交換	18
	後部座席をフラットにする	8
	車の中でスペースを作る	2
近くにあるトイレを利用	ベビーベッドで交換	8
	狭いトイレで対応	3
	和式トイレの使い方を教える	2
施設内のスペースを利用	ひたすらトイレを探す	8
	場所を変える	6
	便利な物品を準備する	6
	助けを呼ぶ	4
その他	用事を中断/外出を控える	10
	交換を減らす工夫	3

表 2

カテゴリー	項目	記述数
おむつ交換の場所	ユニバーサルシート	33
	おむつ交換できる部屋	9
	トイレの数を増やしてほしい	5
使いやすい広さ	介護スペースを考慮した広さ	4
	荷物を置けるスペース	3
介護者の支援	外出先で手伝ってくれる人	5
	ベルト付きの幼児チェア	2
快適さ/清潔さ	臭い/汚染対策	5
	手洗い場	2
	洋式トイレ	1
便利な動線	駐車場から近い/駐車場の確保	4
	分かりやすい表示	3
情報	障害者トイレの場所を事前に調べられる	11
	施設毎の設備の詳細（ホームページ）	12
	施設内の表示	5

表 3

助かったものや希望する支援について表 3 に示します。ユニバーサルシートが最も多く、トイレ内にベッドがなくても、代わりになるスペースを借りることができれば、吸引などその他の医療的ケアも同時にできるという意見がありました。そして、バギーが入り、介助者が動きやすいスペース、物品がおけるスペースやフック、使用済みおむつの処分が記載されていました。合わせて、駐車場の確保、トイレの場所、トイレ内の備品についてのわかりやすい表示と事前に調べられることが記載されていました。

この調査からわかったことは、ニーズの分散化が必要であることです。まず、発達に応じておむつ交換が不要となる子どもを対象としたおむつ交換台は、一般のトイレまたは子どもケアスペースなどに設置されるべきです。バリアフリートイレ内に設置されると、ニーズが集中します。障がいのない乳幼児も着替えが必要な場合もあると思うので、着替え台などは一般のトイレにあるとさらにニーズが分散されると思います。

また、バリアフリートイレの改善も必要です。まずは、ユニバーサルシートの設置場所を増やすことが必要ですが、清潔を保つためには、管理が行き届く場所に設置することが必要だと思います。また、必要なときに助けが求められる場所であることも重要です。ニーズの分散という点では、多機能すぎるトイレを 1 か所作るのではなく、異なる機能をもつ複数のトイレを作り、表示を明確にすることで、利用者が最も使いやすいトイレを選択できるようにすることが必要だと思います。施設内の掲示と合わせて、ホームページ等で検索できることで、外出先の選択が広がります。

今回、この原稿をまとめるにあたり、長崎県医療的ケア児支援センター「つなぐ」の協力を得て、これまでお示した結果をもとにご家族の意見を伺いました。新たに「トイレが狭く、バギーからユニバーサルシートに移乗できなかった」、<床が濡れていて安心して交換できない>、<汚れたままエレベーターで移動しなければならない>、<ベッドの高さが変えられると助かる>、<自然と閉まるドアは通過中に閉まり始めてバギーに当たってしまう>、<トイレまでの施設内のアプローチもホームページに表示してほしい>などの声を得ました。街づくり計画に生かせるよう、行政等に働きかける予定です。

医療的ケアが必要な子がお出かけしやすい環境は、今は障害のない私達が将来、外出しづらい状況になったりしても、気兼ねなく出かけられることにつながります。トイレ問題を特別な子どものための対応と考えず、誰にでも必要な環境であることを、今回、このような機会を頂き、再認識しました。

※竹中晴美さん（個人会員）の活動「みんなにやさしいトイレ会議」からのご紹介で掲載しました。

第3回 子どもとトイレ勉強会

2023年8月23日（水）にオンライン（ZOOM）にて、子どもとトイレの勉強会が開催されました。

子どもの排泄と支援とトイレット・トレーニングについて

子どもの排泄と支援とトイレット・トレーニングについて3人の講師からお話いただきました。



小児の便秘症について

柳 忠宏 個人会員 / 医療法人やなぎクリニック理事長

【はじめに】

慢性便秘は、成人において死亡リスクを高める原因といわれています。その命にかかわるかもしれない便秘は、小児期に始まっていることも多いと考えられます。

【なぜ便秘は慢性化するのか】

便秘だと思っていないことが原因だと考えます。「毎日排便しているので便秘ではありません」と思っている方も多いですが、便秘とは、回数だけではなくて、排便の質が重要です。慢性便秘症の定義は、「便が滞った、または便が出にくい状態である」。便秘の診断基準では、小児の便秘について、排便が週に2回以下という「回数」の基準の他に、過剰な便貯留の既往や便失禁など、排便の「質」に関する基準が6項目中5項目になっています。学童期の便秘の基準では「がまんする姿勢」も基準になっており、排便に対する意識、つまり排便の「質」の重要性がわかります。

小児・青年期 慢性機能性便秘症 診断基準

（4歳までの乳幼児において、1か月間で以下の2項目以上を満たす）

- 1 発達年齢が少なくとも4歳以上の小児で、トイレでの排便が週2回以下
- 2 少なくとも週1回の便失禁
- 3 便をがまんする姿勢または過度の自発的便貯留の既往
- 4 痛みを伴う、あるいは硬い便通の既往
- 5 直腸に大きな便塊の存在
- 6 トイレが詰まるくらい大きな便の既往

Hyams JS, et al. Gastroenterol 2016

【どうやって便秘ははじまるのか】（図：便秘の悪循環）

小児期の便秘が慢性化するのは、「がまん」することが最初のきっかけになります。便を排泄するときの痛みや不快感、環境の変化や慣れないトイレに対する忌避などによって、排便を「がまんをする」と、大腸内に便の停滞時間が長くなり、水分の再吸収が促進され、便が硬くなって貯留されていきます。貯留した硬い便は、排便時に痛み、不快感を引き起こし、再び「がまんする」という悪循環が繰り返されることによって慢性化します。

【便秘の治療は？】

便秘の治療は、3段階で行われます。はじめに、貯留した硬い便（便塞栓）を浣腸などで取り除きます。つぎに、内服薬を継続して便を軟らかく維持することで、排便をスムーズに促しつつ、最後に、排便の習慣づくりにつなげます。排便の習慣とは、水分摂取やバランスの良い食事ですが、食後にトイレに座るようにすることや、トイレット・トレーニング中の乳幼児では、がまんしないように意識して、排便の姿勢などをつかむことが大切だと考えます。最終的には、内服薬を中止して、週に3回以上、十分をすっきり排泄することができると目指します。

乳幼児の慢性便秘の典型的な「がまん姿勢」として足を突っ張って交叉させた状態であることが多いのですが、これが繰り返されることは「いきんでいる」のではなく、便秘の悪循環のはじまりだと認識したほうがいいでしょう。必要があれば、内服治療も行い、便意がきたときに気づいてあげること、次に、和式トイレにしゃがむような姿勢を意識させて、しゃがむ行動ができるようになることを促すことは非常に重要だと思います。しゃがむ姿勢で排便できるようになれば、あとは、探していけるようになることを、周囲がサポート考えます。

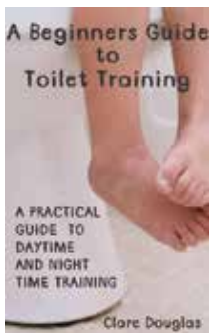


む姿勢で排便できるようにすれば、あとは、自分からトイレへ向かう意識や、自宅以外の場所でもトイレを探していけるようになることを、周囲がサポートして、ほめてあげることで、慢性便秘の予防につながると考えます。



細野 直恒 運営委員 / NPO にいまーる・理事

小職は日本トイレ協会ホームページの「English」サイト (<https://j-toilet.com/?cat=31>) の英訳を担当しています。その関係で村上さんの過去の講演「子どものためのトイレトレーニング」を英訳するにあたり、海外のトイレット・トレーニングの事情も調査してみたくなり、英国のトイレット・トレーニングガイド『A Beginners Guide to Toilet Training』を読みましたので内容についてご紹介します。



2. 英国のトイレット・レーニングとは

トイレット・トレーニング（TT）の海外の書籍を調査してみたところ、多数の関連書籍が刊行されていました。その中でも特に論理的に書かれている Clare Douglas 女史の著作『A Beginners Guide to Toilet Training』という本に注目して和訳しました。導入部分には、「幼児にトイレのトレーニングを受けさせたいという親のニーズには、さまざまな要因が考えられます。その中には周りからのプレッシャー、幼児のオムツを我慢することで親として失格であるとみられるのではないかという心配、幼児の幼稚園への入園、そしてとりわけ『遅いオムツ離れ』から来る緊張やストレスなどが問題です。」との記述がありました。本の内容としては、「状況の想定、失禁が起きない様な配慮、準備、問題の理解、オマルの選択、ご褒美の効果、子どもの服装、旅行時の対処法、反抗的な

子どもへの対応、夜尿の対処、布製か使い捨てのオムツの選択」であり、これらは非常に具体的な方法論として書かれていました。

TT の方法としては、図 2 のようなチェックシートを使用し、「オムツから卒業してオマルかトイレで成功した日にチェックするか星など好きなステッカーを貼って下さい。数回の失禁は構わないですが、57 日以上成功事例が続いた場合、トイレット・トレーニング修了書を送りますので、用紙をポストへ投函して下さい」という説明があります。親は幼児と一緒に楽しみながら毎日記入して行きます。この際、子どもが成功しても失敗しても、効果が出る様な褒め方についてもヒントが述べられていました。めでたく 8 週間の間、成功が持続すれば、図 3 のような立派な TT 修了書を貰えます。TT の歴史は長く、この修了書はその幼児自身が親になった時に、自分の子どもに対して TT の経験を思い出す手段としても役立っているようです。

図 4 は TT で 57 日以上成功期間が続いた幼児の状況です。女子 67 人、男子 69 人でほぼ同数ですが、平均年齢としては、女兒 35 か月に対して男児は 39 か月ということで、女子児童の方が少し早く修了するようです。特に幼児の頃は女兒の発達が早いので、多分そうでしょう。

活動報告

第3回 子どもとトイレ勉強会

4. 便育とトイレット・トレーニング

「育」の付く言葉は、保育、教育、成育、食育などがありますが、もともと「便育」という言葉は、村上さんから発信されたようです。便育と TT を比べた場合、TT では、オムツから卒業して、オマルかトイレの使用までのプロセスに注目しているのに対して、便育では、さらに広い概念で、保育、教育、成育、食育までを含み、日常生活場面での自立へも視野に入れているようです。

読後感として、TT のような方法論は、欧米の合理的な考え方を元にして、良く出来ていると感じました。



図2 TT チェックシート

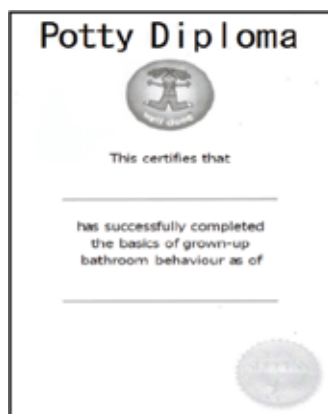


図3 TT 修了書

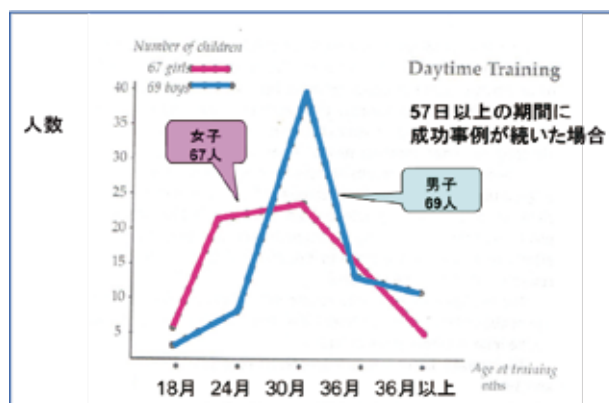


図4 トイレトレーニング成功時期の男女比較



日本の保育園における排泄支援について

村上八千世 運営委員 / 常磐短期大学幼児教育保育学科准教授
アクトウェア研究所

1. 子どもの排泄の時期がどんどん遅くなっている

日本に限らず子どもの排泄の自立が年々遅くなっています。1960年代では「おむつ離れ」の時期は21.4か月であったという報告（末松, 1994）もありますが、村上が2022年に保育者対象に行なった調査（村上, 2023）では30～36か月頃に排泄が自立するという結果が得られました。約60年の間になんと9～15か月も遅くなっていることになります。それでは一体昔と今では何が違うのでしょうか。

2. コミュニティの文化が変わると発達も変わる

アメリカの発達心理学者バーバラ・ロゴフは著書『文化的営みとしての発達』（2006）の中で「人間は、自らの属するコミュニティの社会文化的活動への参加のしかたの変容を通して発達します。そしてそのコミュニティもまた変化するのです。」と述べています。私たちが所属する社会の価値観によって、「いつごろまでにどのくらいの発達を遂げて欲しい」のか子ども達への期待感も違ってきます。

東アフリカのコミュニティのフィールド調査（deVries & deVries, 1977）の内容は、現代の日本人にとっては衝撃的な内容です。そのコミュニティでは乳児は生まれてすぐに学習できる存在であると考えられており、生後数週間のうちにトイレット・トレーニングを開始し、子どもは4～6か月までにはお漏らしをしなくなるというのです。それが可能な背景には乳児は生後2か月間は母親の身体にピッタリと密着して過ごすため、乳児の微細な動きにも母親が敏感に反応できること、その後も周囲の家族から積極的に世話を受けやはり排泄のサインを敏感にキャッチしてもらえる家族文化があること、トイレルームまで行かなくても周囲の地面で簡単に用を足すことができる環境があること、着脱が複雑な衣服がないなどの条件があります。また子どもといえども早く発達して家事や農業の担い手となることを強く期待されており、実際に5歳になれば働き手として機能するようになります。

かつての日本の子育てを振り返ってみると東アフリカのコミュニティほどではないにしろ、やはり母親が子をおんぶしながらコミュニケーションをとり、背中で排泄のサインを察知したら縁側から庭に向かって子どもの体を支えて用を足させるというようなことを行っていたのです。

現代の日本では満 2 歳を過ぎてからのトイレット・トレーニングが推奨され、早すぎるトレーニングはかえって子どもの自立を遠ざけると訴える育児書もみられます。小学校へ入学するまでにオムツが外れれば大丈夫！という声も聞こえてくる程です。

3. 排泄のサインを受取ることは保育者と子どもの信頼関係を築くことでもある

保育園では保育者はどのように子どもの排泄のサインを受取ることができるのか観察と保育者へのインタビューを行ってみました（村上，準備中）。対象の保育園では普段は 1 歳を過ぎるまではオマルを使用していませんでしたが、月齢 9 か月、8 か月、4 か月の子どもを対象にオマルを使った排泄支援を行ってもらったところ、4 か月の子どもは 1 週目で、9 か月の子どもは 2 週目で、8 か月の子どもは 5 週目でオマル（それに代わる容器も含む）に排尿ができるようになりました。そして保育者はオマルに座った子どもの微細な表情や筋肉の動きを敏感に受け取り、「子どもは『今から出そうだ』と思っているみたい」「頑張って出そうとしている」など子どもが感じている身体感覚を共有するようなインタビュー内容を得ることができました。オムツを交換するだけの支援方法の時とオマルを使った時では質的に違う声掛けを行っていることもわかりました。

保育園では園によって排泄支援の方法は様々ですが、紙オムツの普及などによってオマルやトイレを使い始める時期も遅くなっているのではないかと思います。またオマルやトイレで用が足せるようになって、オムツが外れる時期はもう少し先になってしまうため、あえて早めにオマルやトイレの使用を開始する必要性を感じないのかもしれませんが、しかし、どうやら子どもは私たちが考えているよりも早くオマルやトイレで用を足せる可能性があることがわかりました。また、今回の調査でわかった最も興味深いことは保育者が子どもの排泄のタイミングを子どもと共有することで互いの信頼関係が深まるということです。子どもにとってこの時期の養育者との信頼関係（愛着）はその後の様々な発達の基盤となっていることはいまでもありません。

「トイレット・トレーニング」は子どもがオムツを卒業してトイレで排泄できるようになるためのトレーニングですが、東アフリカの事例からも今回の調査からも子どもと養育者のコミュニケーションが欠かせない条件であることがわかります。養育者の子どものサイン（欲求）を受取ろうとする態度が子ども理解を深め、大人に理解してもらっていると感じた子どもは自己肯定感を高め、互いの信頼感が深まっていくというやりとりが重要なようです。

（柳 忠宏 略歴）

2002 年 長崎大学卒業

2003 年 慶應義塾大学小児科入局

2009 年 国立成育医療センター消化器科臨床研究員

2011 年 久留米大学医学部小児科学教室 小児消化器班

2017 年 医療法人やなぎクリニック院長

2019 年 同クリニック 理事長

（細野 直恒 略歴）

1972 年 福祉国家スウェーデンでインターン研修

1974 年 慶應義塾大学工学部修士課程修了（修士）、同年、沖電気工業株式会社入社、

1981 年 英マンチェスター大学（MSc.）、（社費留学）

2003 年 慶應義塾大学理工学部開放環境科学専攻（博士）

業績：通産省第 5 世代コンピュータプロジェクト、機械翻訳、音響のデジタル処理、米ベンチャー会社設立など

現在：NPO にいまーる・理事、ISO/JIS 委員、日本トイレ協会運営委員などを担務

専門分野：人間工学、ユニバーサル・デザインなど

（村上 八千世 略歴）

1998 年 メーカー勤務、トイレ環境コンサルティング会社勤務を経て独立、アクトウェア研究所設立

2000 年「うんこのえほん」シリーズ執筆

2004 年 早稲田大学人間科学研究科修了（発達心理学）

2019 年 非常勤講師などを経て、常磐短期大学准教授

私の 推薦トイレ

寂れた砂浜に佇む、ご長寿トイレ

江藤克 学生会員 / 横浜国立大学大学院

魅力的なトイレって？

人それぞれ「いいな！」と思うトイレは違うのではないのでしょうか。最新の技術を搭載したトイレ、安心安全なトイレ、多様な人に配慮のできているトイレなどなど。ですが、どうしても子どもの頃に使ったトイレは記憶からなかなか消えないのではないのでしょうか。

私は国際協力の現場におけるトイレに興味があり、中でも環境に配慮したトイレに普段は興味があります。しかし、今回は忘れられない、少し汚れているけど印象深いトイレを紹介しようと思います。また、私の推薦トイレを引いた眼で見てみます。



ローカルな雰囲気にもまれる

私の推薦トイレは、神奈川県三浦市の海岸にある「菊名公衆トイレ」です。三浦はサーフィンや海水浴のできる砂浜があるのですが、その奥にいったところにある地元の散歩する人や通学する小学生が通り過ぎるような場所にあります。

10 年以上前、10 歳もないくらいの私は父と海岸で磯遊びしていました。そこでトイレに行きたくなり出会ったのがこのトイレです。見慣れない砂浜に立つ公衆トイレに恐る恐る入ると、小便器がない、使い方は察するが正しいのか分からないオープンなトイレでした。とても衝撃的な思い出です。

それから何度か使った後 10 年ほど月日が経ち、バイトのついでに立ち寄ってみました。雰囲気は変わらず、少し経年劣化が進んでるくらいでした。落書きがあったりするものの、不思議と入ることにためらいはありません。やっぱり一面コンクリ張りの床は砂でじゃりじゃりし、なぜか小便器の前にはマジックで灰皿と書かれたブリキバケツがおいてある。台風の影響で、窓ガラスが割れ窓枠だけが残っている。蛇口は下から押す衛生水栓。



おそらくこれが人通りの多い駅前にあったらすぐに取り壊されてしまうでしょう。それでも、三浦の海岸には残っています。私のこの「汚い」トイレが好きな感情と、「時代遅れ」のトイレが未だに残る不思議さを市の財政的な視点以外でどう説明したらよいのでしょうか。私は場所性になにか理由が隠されていると思います。このトイレは風景と文化の一部として日常に溶け込んでいます。また、建設当初はありふれていたであろう形式のトイレも、私の記憶のように刻み込まれています。人や地域環境があってこそそのトイレだとしみじみ感じさせてくれる、そんなトイレです。

日常の中のトイレ

改めて魅力的なトイレについて考えてみましょう。皆さまがトイレを選ぶにも、私が「菊名公衆トイレ」選択にも価値判断がつきまといます。違う価値観を基にしていたとしても、共通することはある場所（状況）で使われるために現れる場所性が絡んでくることです。

今回の推薦トイレはそんな 1 例を紹介し、これまで・これからの推薦トイレが少しでも面白くなる視点も提供できていたら嬉しいです。

新入会員のご紹介



川上 美季さん 個人会員

Q1 トイレ協会に入会したいと思われたきっかけ、理由はなんですか？

大学時代にフランスへ留学したことがあるのですが、そこで日本と海外のトイレの快適さやアクセスの良さ、悪さに大きな違いを感じトイレに興味を持ち始めました。当協会に入会すれば、様々な情報を入手でき、また色々な方と繋がることができると思い、入会させていただきました。

Q2 どんなお仕事をされていますか？

建築関係の企業で働いていて、特に空調・衛生の分野でCAD（パソコンのソフト）を使って建物の施工図を描いています。大学時代は外国語学部フランス語圏専攻だったので、まったく分野の異なる仕事をしていますが、ゼロから学びながら業務をしています。

Q3 会員として今後関わっていききたいことなどご自由にどうぞ

セミナーや若者の会に参加等していききたいです

Q4 あなたにとってトイレとは？

誰もが毎日使用する、生活する上で無くてはならないものです。また、自分だけの空間になってリラックスしたり落ち着ける場所でもあります。世界中の人がそんな快適なトイレへのアクセスを持てたら良いなと思っています。



酒井 由美子さん 個人会員

Q1 トイレ協会に入会したいと思われたきっかけ、理由はなんですか？

以前からトイレ空間に非常に興味があり、昨年のビックサイトセミナーに参加してもっと皆さんの活動を知りたいと思いました。

Q2 どんなお仕事をされていますか？

マンションのリフォーム営業

Q3 会員として今後関わっていききたいことなどご自由にどうぞ

個人宅のトイレ改修の枠を出て、施設や公共のトイレ改修に携わりたいです。セミナーではトイレ維持管理、災害トイレへの興味も広がりました。

Q4 あなたにとってトイレとは？

衣食住に並ぶ必要不可欠な空間。



類家 千怜さん 学生会員

Q1 トイレ協会に入会したいと思われたきっかけ、理由はなんですか？

トイレ空間が好きで、同じくトイレを愛する方々と関わる機会が欲しかったからです。また今までは漠然とトイレ空間が好きで Instagram でトイレの写真を発信していましたが、トイレに関する社会問題やデザイン学等を学びたいと思ったからです。

Instagram ID : __toilet

Q2 何を勉強されていますか？

物理学、原子核理論を専攻しています。物理学の中でも特に量子力学が好きです。研究に用いるためプログラミングも学んでいます。

Q3 会員として今後関わっていききたいことなどご自由にどうぞ

研究会やトイレシンポジウムに参加してトイレに関する知識を深めたいです。特に空間デザインに興味があるのでデザインや立地ごとの利用者のニーズなどを学びたいです。

Q4 あなたにとってトイレとは？

リセットと癒しの空間



〒112-0003

東京都文京区春日1-5-3春日タウンホーム1F-A

jimukyoku@j-toilet.com

<https://j-toilet.com/>

検索



広報部提案&推薦！出ました試作ピンバッジ！スッキリ爽やかなデザイン、よく見ると便器やピクトグラムサインが隠れています。QRコードとして公式サイトへ飛べます！投稿して下さった方々へのお礼としてお送りします。

サイズ：19mm×19mm

お悔み

長年に渡り副会長として当協会の活動を支えてくださった、名誉理事の鎌田元康先生（東京大学名誉教授）が、令和5年12月11日（月）に逝去されました。

ご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

能登半島大地震に対し、深いお悔みを表します。被災された方々が多く、トイレをはじめとする日常生活での困難に直面しているという報道に心が痛みます。一日も早い復興を祈りつつ、万一の時に備えて個人での携帯トイレ準備を進めていきましょう。（山戸 伸孝）

能登半島地震で被災された皆様へ、心からお見舞い申し上げます。今回の地震は、公助・共助が手薄と考えられる元旦に発生し、大震度の地震が短期間に頻発する（震度5弱以上の地震が合計16回※1）という未曾有の震災となってしまいました。ライフライン（上水道・下水道・電気等）の不全会多数発生しており、多くのエリア、且つ長期間に亘り「トイレ不全」が発生しています。当方も「災害用トイレ」の支援に携わっており、快適なトイレ復旧の一助となれるよう努力していきたいと思います。※1 2024年1月14日現在（新妻 普宣）

今回も能登半島地震に対して支援物資である仮設トイレの手配を行っておりました。毎回対応して思うのは、一度として同じパターンはなく今回は特に輸送の手配と現地での設置作業が危険が伴い天候にも左右され困難になっております。少しでも被災地の方のお役に立てるよう努力します。（谷本 亘）

トイレは命を守ります。でも普段から、その意識が必要であることを心の底から感じました。この教訓を実際に生かしていくことの大切さを実感しました。さて昨年のシンポジウムでリアルにお目にかかれたことを良いことに？皆様に原稿依頼！！お陰様でお正月特番にふさわしいページ立てになりました。（竹中 晴美）

能登半島地震において、今までの震災とはまた違った厳しい条件の中、トイレについても困難な状況が続いていることに、心が痛みます。トイレシンポで紹介されたトイレトレーラーが、被災地で使用されている報道は、その活用も連携の賜物と実感いたしました。改めて、自分たちでできる準備を確実に進めていくことも大切だと思いました。（浅井 佐知子）

能登半島地震で被災された皆様へ、心からお見舞い申し上げます。一日も早い復興をお祈りします。我が家でも改めて災害備蓄用品の見直しをしました。皆さまも、見直されてはいかがでしょう。災害用ご飯に慣れておくことも大切です。（高橋 佳乃）

能登半島地震で被災された多くの方が非常に厳しい生活をされていることに本当に心が痛みます。一日も早い復興をお祈りします。災害・仮設トイレ研究会の法人会員の皆様が被災地のトイレ支援に力を尽くしてくださっていますが、諸々の悪状況等から十分に支援が届いているとはいえないようです。改めて備えることの大事さを多くの方に知っていただきたいです。（小澤 美紀）